

機関番号：32612

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820043

研究課題名（和文）20 世紀末スペイン文学における異端審問の表象について

研究課題名（英文）Representation of the Spanish Inquisition in Spanish Literature at the end of the Twentieth Century

研究代表者

丸田 千花子（MARUTA CHIKAKO）

慶應義塾大学・経済学部・講師

研究者番号：00548414

研究成果の概要（和文）：

本研究では 16 世紀のスペイン異端審問の事件を題材とした歴史小説、『ルクレシアの幻視』（1996）および『異端者』（1998）について研究した。1990 年代に 2 編が発表された点に着目しながら、両小説が歴史研究とは異なる観点から事件の様相を読者に提示することで、異端審問の事例に新たな解釈を加えたこと、主人公が異端に至る過程でみられた家族関係の破たんを通して現代スペイン社会にも通じる普遍的な家族の問題を提示していることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This research is about *Las visiones de Lucrecia* (1996) and *El hereje* (1998), two historical novels about the Spanish Inquisition of the sixteenth century. Paying attention to the fact that two novels were published in the 1990s, I argued that two novels reexamine and reinterpret the Inquisitorial cases taking different approach from historians' research, and through describing the protagonists' failed relationship to their family, the novelists raise the issue of family, which is also seen in present-day Spanish society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	540,000	162,000	702,000
2010 年度	610,000	183,000	793,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,150,000	345,000	1,495,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：外国語文学（中・英・仏・独を除く）、スペイン文学、異端審問、歴史小説

1. 研究開始当初の背景

(1) スペインでは 1939 年から 36 年間続いたフランコ将軍による独裁政権下において、体制批判につながるような内容の映像や出版物は検閲制度により上映・発刊はいうに及ばず、体制を支援するあらゆる機関に関する批判的研究はスペイン国内ではなされなかった。特にフランコ政権はスペイン・カトリッ

ク教会の全面的な支援を受けたこと、また政権とその屋台骨を支える軍隊は、「異教徒」である反教権主義の共和国政府から救った「現代の十字軍である」と称したこともあり、教会批判となりうる研究はフランコ政権下では控えられた。なかでも 15 世紀から 19 世紀に存在したスペイン異端審問の研究は、内戦による消失をのがれた膨大な裁判史料が

古文書に保管されているにもかかわらず、政権中は史料のカタログ作成を含めた歴史的な研究は制限された。1975年フランコ政権終焉以降、裁判を記録した古文書へのアクセスの制限は解かれ、スペインの「黒い伝説」と揶揄された異端審問の史料研究、事例研究が本格的に始まった。

(2)このように1975年以後、教会史研究において、異端審問の年代別、地域別、事例別の研究が始まり、スペイン内外の研究者による研究が発表された一方、文学の場でも1990年代に入り、実際の事例を題材とした小説カルメン・リエラ Carme Riera『青き海のはるか彼方で』*Dins el darer blau* (カタラン語 1994, *En el último azul* スペイン語版 1996)、ホセ・マリア・メリーノ José María Merino『ルクレシアの幻視』(*Las visiones de Lucrecia*, 1996)、ミゲル・デリーベス Miguel Delibes『異端者』(*El hereje*, 1998) が相次いで発表された。各小説の時代背景、地域、主人公の罪状に共通点はないものの、1975年以後の異端審問研究の成果が広く世に知られていったことが、世代の異なる作家たちの執筆の動機となったことは間違いないと考えられる。

(3)20世紀スペインの文学史をひも解いても異端審問の事例を題材とした歴史小説は書かれていない。この点を考えると、90年代に入ってから現象はスペイン文学にとって特筆すべきことである。そこで、申請者は90年代半ばの異端審問を題材とした歴史小説の出現は、史料研究の進化だけではなく、スペイン社会にみられる変化を作家たちが過去の異端審問と関連づけてとらえたからではないかと推測した。そして作家たちが不寛容な時代の国家機関である異端審問の表象を通して、現代スペイン社会にみられる不寛容さを問題として示唆しているのではないかと考察し、学位論文(博士論文、2007年)で研究結果をまとめた。今回の研究は、前回の研究をさらに深化させ、異なる観点から2作品について分析を試みようとした。一次史料である裁判記録の入手と精密な分析の遂行による、小説、歴史研究書、一次史料、それぞれを比較研究するものである。

2作品についての先行研究は国内外を問わず少なく、さらに現代スペイン文学における歴史小説研究も他の文学ジャンルに比べて少ない。こうしたことが研究を進める動機となり、一次史料の精査・分析から小説における異端審問の表象についてさらに検証したいと考えて申請した。

2. 研究の目的

スペイン異端審問を題材とした歴史小説

ホセ・マリア・メリーノ『ルクレシアの幻視』とミゲル・デリーベス『異端者』-において異端審問の一次史料、歴史研究書、小説を比較することで90年代後半の歴史小説における異端審問の表象を明らかにすることが目的である。

(1)『ルクレシアの幻視』はフェリーペ2世治世下の16世紀半ばが舞台である。国王の統治能力の欠如からスペイン国家が崩壊するという一連の夢をみた市井の女性ルクレシアは、夢を記した記録がマドリードに広まったことを恐れた異端審問の手によって、扇動の罪で逮捕されたという史実を題材としている。小説の主人公であり、異端審問裁判の被告であるルクレシア・デ・レオンについては、史料研究が進み、英歴史学者リチャード・ケーガン Richard Kagan が『ルクレシアの夢』(*Lucrecia's Dreams*, 1990)において、事件の詳細と当時の社会状況を分析した研究結果を発表している。しかし、ケーガンがその書で示したルクレシア像とメリーノの小説に登場するルクレシア像には大きな離れがある。

ケーガンはルクレシアを社会的な上昇志向の強い、野心的な市井の女性であると解釈したが、メリーノは、ルクレシアが「夢の記録」を記した反国王派である筆記者であり、高位聖職者のアロンソ・デ・メンドーサの政治的野心の犠牲者として小説に描いた。小説はフィクションである点を考慮しても、ケーガン、メリーノは同一の裁判史料を用いているため、両者がそれぞれに提示したルクレシア像の違いは何に由来するのかが問題となる。そこで『ルクレシアの幻視』については、メリーノの小説およびケーガンの研究書がベースとした一次史料である異端審問の古文書を手に入れたことにより、2つの書における史料の解釈をめぐる相違点を明らかにすることを目的とした。

(2)『異端者』(1998)の研究においては、小説の題材となっている16世紀バリャドリッドにおけるルター派プロテスタントに対する異端審問は史実であるものの、主人公シプリアーノ・サルセドは虚構の人物であるため、単純に小説と歴史研究書を比較して、両者の相違点を検証することは難しい。そこで、小説が主人公のたどった人生の軌跡に着目して、主人公にとっての異端審問の意義について明らかにすることを目的とした。特に以下の2点に焦点をあてた。小説に描写されている主人公と家族の破たんした関係に注目して、主人公が異端となった経緯と家族との関連性について検証する。小説の分析から、主人公と家族(妻、父)との関係破たんが遠因となり、主人公が

ルター派の思想に傾倒していくことがわたったため、この点について考察する。インタビューなどでのデリーベスの発言から、彼にとって歴史小説は過去を再提示している場ではなく同時に、現在における社会問題をも示唆している場であるということが明らかになったため、デリーベスの全作品を通してのテーマである現代スペイン社会問題都市部と農村部の経済的・社会的・文化的格差がどのように小説で描写されているか、また主人公と妻の関係にどのように反映されているかについて考察する。

3. 研究の方法

(1)資料収集

スペイン・アメリカの各種図書館、公文書館において、英語・スペイン語による書籍、雑誌、公文書の収集にあたった。

スペイン・マドリッドにある国立歴史古文書所・異端審問部門に所蔵されているトレード異端審問所管轄の「ルクレシア・デ・レオン」に関する裁判記録の収集を行った。

マドリッドにある国立図書館においては研究対象作品および作家、最新のスペイン現代文学に関連する書籍・雑誌の収集を行った。特に有意義だったのは、近年スペインで刊行された書籍に掲載されている論文、最新刊の雑誌論文の収集だった。これらは米国MLAの文献データベースや図書館のウェブ・カタログから発見するのは難しい。また米国内図書館で入手が不可能だった書籍・雑誌論文の収集も行った。

アメリカ・シカゴ大学図書館においては、11月に学会発表予定であった『異端者』の研究にかかる家族関係、特に父子関係についての研究書や雑誌論文の収集にあたった。加えてアメリカ国内で刊行された書籍・雑誌論文などの収集を行い、新たに発見した文献を入手した。またシカゴ市内にあるニューベリー・ライブラリーにおいては大学図書館に所蔵されていない20世紀初頭の異端審問に関する書籍にあたった。

(2)個人研究

『ルクレシアの幻視』の研究では16世紀スペイン各地に出現した女性幻視者に対する異端審問関連の文献、資料を収集し、社会学的研究を中心に分析した。主人公の幻視者ルクレシア・とその他の女性幻視者に対する当時の社会の態度が、ルクレシアと彼女の夢を記録した筆記者の関係にどのような影響を与えたのかについて考察した。この点についてはさらにルクレシアに対するメリーノとケーガンの評価の違いに大きく関連があったと分析した。

また国立古文書館で収集した裁判史料を分析し、史料の内容がどのように小説に反映しているか、また研究書において解釈されているかについて明らかにした。

『異端者』の研究についてはスペインのプロテスタント関連の文献・資料を収集・分析から研究を始めた。ルター派として異端審問にかけられた被告の多くが都市のブルジョワ階級出身の知識人であるという歴史的事実と小説の主人公との共通性を探り、異端審問との関係を分析した。

家族関係の研究に関しては、16世紀の夫婦関係、父子関係を中心とした家族史の文献を精読した。デリーベスの他の小説のテーマにもなっている都市と地方の格差問題について、他の小説を精読しながら考察した。また小説における父子関係の分析では、心理学・社会学に関する文献を精読し、小説で描かれている主人公の父への恐怖が何を意味しているのか、異端審問との関連はあるのかについて考察した。また小説で言及されている「父」は生物学上の父親以外のシンボル 国家の父である国王、天上界の父である神 - を表象している可能性についても考察した。

4. 研究成果

(1)『ルクレシアの幻視』の研究では、文盲の被告ルクレシアが見た国家崩壊の夢は、筆記者たちによって「夢の記録」という文字テキストとして当時の社会に広く出回り、異端審問に逮捕されるきっかけとなった。裁判史料に収録されている筆記者が書いた「夢の記録」の余白には、彼らの手によるものとみられる注釈が書かれていた。これは一例だが、こうしたことなどからルクレシアの「夢の記録」は、ケーガンも指摘しているように彼女個人の言葉が忠実に再現された文書というよりは、筆記者たちの言語的・思想的解釈が加わった共同作業の産物である可能性が高い。「夢の記録」が完成するまで過程、つまりルクレシアと筆記者たちの関係に重点をおくと、社会的階級のちがひ、教育の有無などにより、筆記者たちのルクレシアに対する優位性はいなめず、メリーノはルクレシアが政治的に利用された犠牲者であると解釈し、小説に提示したと考えられる。ルクレシアの口述した夢の内容と筆記者たちが文書として「夢の記録」を完成するまでの過程に着目したことは、メタフィクション小説を執筆した経験をもつメリーノならではの着眼点であるといえる。一方、ケーガンはあくまでも史料にある、被告や証人の証言をベースに事件を検証した結果、ルクレシアは政治的野心をもつ女性と結論づけたと考えられる。このように筆記者たちの「夢の記録」への介入の程度や可能性に対するメリーノとケーガンの扱いのちがひが

結果として、相反する2つのルクレシア像が出現したことが明らかになった。

さらに家長である父の不在が多い家庭における母親の役割、また母の、ルクレシアに対する影響力の大きさについても両者の扱いはことなっていることが明らかになった。裁判史料ではほとんど素性の不明な母親の存在についてケーガンは著書でほとんど言及していない一方、メリーノは史料に残る他の証言から母親像を膨らませた。家庭内の経済的理由から母が筆記者に協力したと解釈し、ルクレシアは家族の犠牲者であることも小説は示唆している。研究成果は第22回CANELA(日本・スペイン・ラテンアメリカ)学会にて“Una visionaria procesada por la Inquisición: *Las visiones de Lucrecia* (1996), novela de José María Merino”として口頭発表にまとめ、さらに論文として2011年3月刊行の学会誌に発表した。

(2)『異端者』の研究では小説に描かれた家族関係(夫婦関係、父子関係)の破たんが主人公のプロテスタント改宗に関係すると同時に90年代スペインの社会事情を反映しているということを示した。主人公の夫婦関係の破たんの背景には、作家が長年小説のテーマとしている現代スペイン社会における都市と農村の地域格差の問題が隠されていると考察し、論文「ミゲル・デリーベス『異端者』(1998)における夫婦像」として発表した。

また父子関係の分析から主人公の父に対する恐怖心は権力の体現である精神世界の父である神、世俗世界の父である国王への恐怖心でもあると考察し、父子関係と異端審問との関連性を見出した。その研究成果は“Fear in Miguel Delibes' *El hereje* (1998)”として第52回MMLA(現代アメリカ現代語中西部学会)年次総会にて口頭発表した。

(3)上記の個別の作品研究による成果と同時に、両作品に共通する事項として以下のことが明らかになった。

両作品は異端審問と個人の関わりを詳細に提示することにより、宗教をもって国家の統合を図ろうとした宗教的に不寛容なスペイン黄金世紀(16、17世紀)は、社会の多数とは「異なる」ものをもつ個人を権力が排斥する社会であったことをあらためて小説は示している。

また2編の小説では、歴史書とは異なる観点から過去の事例を検証していると同時に、現代的な視点や普遍的なテーマ 特に今回の研究対象の小説では、「家族関係の破たん」も合わせて盛り込まれていることが明らかになった。

(4)2009年度の調査旅行では当初予定していた作家へのインタビューはスケジュールの関係で叶わなかったが、スペイン現代文学研究者キャロリン・リッチモンド氏と意見交換をする機会に恵まれ、今後のスペイン現代文学の研究遂行について有益な助言をもらった。2010年度調査旅行ではコロンビア大学名誉教授ゴンサロ・ソベハーノ氏、およびフォーダム大学スペイン語学部専任講師ケリー・カーステン氏と今回の研究成果について意見交換を行った。特にアメリカでの学会発表原稿に対する両氏の意見は、今後論文として発表する際に反映できるという点で重要な成果だった。

(5)今回の研究はすでに今後の新たな研究の萌芽となっている。2作品に共通してみられる家族関係の崩壊 とくに父子関係の破たんの様相と、フランコ政権後の現代スペイン社会における家族観の変化との関連性については、さらに他のジャンルや年代の小説の精読・考察を深化することによって、明らかにできると考えている。そこで今後の研究課題とし、その成果を国内外において発表していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

丸田千花子、ミゲル・デリーベス『異端者』(1998)における夫婦像、上智ヨーロッパ研究、査読有、3巻、2010、61-80
Maruta, Chikako, Una visionaria procesada por la Inquisición: *Las visiones de Lucrecia* (1996), novela de José María Merino, Cuadernos CANELA, 査読有、vol.22、2010、77-91

[学会発表](計2件)

丸田千花子、Fear in Miguel Delibes' *El hereje* (1998)、The 52nd Annual Convention of Midwest Modern Language Association、2010年11月5日、Hyatt Regency McCormickPlace, Chicago, (アメリカ)

丸田千花子、Una visionaria procesada por la Inquisición: *Las visiones de Lucrecia* (1996), novela de José María Merino, CANELA(日本・スペイン・ラテンアメリカ学会)第22回大会、2010年5月30日、東京セルバンテス文化センター(東京)

6. 研究組織

(1)研究代表者

丸田 千花子 (MARUTA CHIKAKO)
慶應義塾大学・経済学部・講師
研究者番号：00548414